

黒田清輝と日清戦役

隈元謙次郎

一

明治二十六年七月、黒田清輝は滯佛十年の研鑽を終へて歸朝した。

而も、翌明治二十七年には日清戦役の勃發に際會し、彼も亦同年十二月初旬より陸軍大將大山巖の率ゐる第二軍に従軍し、翌二十八年二月中旬に互つて金州より威海衛攻略に参加し、具に辛酸を嘗めた。而して、此の従軍の結果として大作の完成されたものを見ないが、彼は寫生帖四冊に多くの寫生を遺し、又佛蘭西ル・モンド・イリュストレー社の爲の挿繪畫稿數枚を描いてゐる。又彼はその出發より歸朝迄の従軍中の動靜を詳細に日記に書き遺してゐる(註一)。彼が畫家として旅行に寫生帖を常に携帯したことは敢て驚くに足りないが、滯佛中の青年時代よりその逝去に至るまで、日常の日記と共に多くの旅行記を遺してゐることは、斯かる偉大なる畫家の場合殊に驚嘆すべきことである。茲に、之等の従軍中の寫生帖と日記及び書簡を中心として稿を草し度いと思ふ。

黒田清輝と日清戦役

明治二十七年八月一日、我が國は清國に對する宣戰を布告した。陸軍大將有栖川宮熾仁親王殿下を參謀總長に陸軍中將川上操六を次長に戰時體制を整へ、陸軍大將山縣有朋は第一軍(第三、第五師團)の司令官とし、同じく大山巖は第二軍(第二、第六師團)の司令官として將兵を率ゐて出動した。此の戦役には、夙く山本芳翠をはじめ淺井忠、小山正太郎、久保田米僊等が従軍してゐた。而して、十一月に至り、二十九歳の青年畫家黒田清輝は巴里ル・モンド・イリュストレー社の通信員を依囑され、従軍を志願して廣島に赴いた。是より曩、十月十六日東京に於て彼は「清兵捕虜新橋驛着圖」(高一・五・〇 幅二二・八 合田弘一氏藏 PL. VII. 1 參照)及び「清兵捕虜の一人」(高一・五・五 幅二二・六 合田弘一氏藏)のペン畫素描を描いてゐる(註二)。

第三軍の出動と共に従軍を豫期してゐた彼は、十一月十日頃既に廣島に赴き、その出動を待った。而して

來て見ると大分調子が違ふわい。第三軍の出陣は未だ何日頃になるかちつとも知れず、知れる迄は少なくとも一ヶ月位は掛る。夫れまではぶらりとし

て居らなければならぬ。だが幸に此邊は景色が中々いゝ。田舎では今切りに稲の穂などをこいだりなんかして居て面白い。殊に尾の道と云ふ處から此方の景色がいゝ。昨夜不圖 Rigot (註三) に出遇つた。丁度隣の旅籠屋に夫婦で宿つて居る。いゝ話相手だ (註四)。

と久米桂一郎に消息を報じ、又京都の畫家中村勝治郎 (註五) に宛て、

第一圖 嚴島紅葉谷

東京 合田弘一氏藏

處だ。全體畫工はいゝ、畫さへかけば其外には何のつとめも無いやうなものなれど、畫などは無用に近きものゝやうに思はれ居る今日、そんなものを云ひ草にして引込んで居るは命がをしいものとしきや聞えず、つまらない命をたいそうらしく思つて居るやうに思はれては甚だ迷惑ではないか。何にしろ僕は自分のする丈の事をして置けばいいのだ。それゆゑわざ／＼此處迄出て來て命令を待つて居る次第なり。いよく戦地へ出るか出ぬかは僕の知た事ぢやない。僕の體は進上して有るのだ。以上

十一月十七日

黑田 拜

中村 君

(註六)

と廣島滯留中の幾分焦慮せる氣持と、從軍の堅い決意を披瀝してゐる。

而して廣島滯在中彼は將兵、軍馬等の斷片的な寫生 (美術研究所藏寫生帖第十五號 高一・二・二種 幅一八・一・二種 PL. VIII 4; PL. IX 5, 6 參照) や、負傷將士の歸還、或は清國捕虜の廣島驛到着の圖等 (美術研究所藏寫生帖第二十七號 高一・一・六種 幅一九・〇・〇種 PL. VIII 1, 2 參照) を描いてゐる。又十一月十八日には嚴島へ赴き、數日滯在珍らしく數枚の水彩畫を描いた (第一圖參照)。此の作品は出發に先立ち合田清へ送つたが、久米への書簡の末尾に

嚴島の水繪は合田へ送て置く、己がいきついたら皆への記念物と思へと報じてゐる。 (註七)

十五日つけの委しき御手紙只今讀みました。今度は不思議に行違ひ、今と爲ては如何とも致し方なし。只残念だと云ふの外別に考も言葉も出ず。君の説の如く此處にぶら／＼して暮らして居るよりも京都へ出て行く方が僕の身に取つて至極妙なれど、用事なく京都に居ると云ては只遊と計りに思はれ、夫れに何時從軍の事が極まるやも計られず、其時直に頭を出し得ぬ様にては面目なし。僕が戦地へ向ふと云事に爲たは從軍して戦の狀を寫す爲とは云ふものゝ、其實は只世間に對する僕一人の義務と云ふ處が第一の

(註一) 從軍日記に二あり、共に今日黒田家に保存せらる。一は明治二十七年十一月二十四日廣島滯在に始まり、明治二十八年二月十六日歸朝に至る迄終始懷中に所持せる鉛筆書きの小型 (高一・四種、幅九種) の手帖であり、二は其の一部即ち明治二十八年一月十八日より同三十日に至る部分を歸朝後修飾淨書せる毛筆による和綴本 (高二・九種、幅一五・四種) である。

(註二) これ等は洋風木版彫刻家合田清に依つて版畫に製作されてゐる。

(註三) ビゴオ。佛蘭西畫家、明治十七年陸軍士官學校教師として來朝、後、吾が風俗を漫畫風に描いて知らる。

(註四) 久米桂一郎宛書簡(光風第參號所載)。

(註五) 京都の洋風畫家。初め小山三造に學ぶ。後、東京美術學校助教となる。

(註六) 從軍日記第二所載。

(註七) 久米宛書簡(光風第參號所載)。

二

滯廣二旬の後漸く第二軍に従軍のこと決し、十一月二十九日運送船豊橋丸に乗船、宇品港を出帆した。これより曩、十一月二十四日附の日記に

十一月二十四日 旅順口占領の報初めて到る。此の報知に依而オレの進退がいよいよ定ると云ふのだから愉快一層也。今夜村田少佐に面した。拙者來廣の主意を述ぶ。云々(註一)。

と記してゐる。次で、翌二十五日軍令部長海軍中將樺山資紀及び參謀次長陸軍中將川上操六に面し、二十七日に至り從軍畫家として大山大將の第二軍に従軍すること、なつた(註二)。

運送船豊橋丸には恰も 山階宮殿下の御乗船があり、出帆に際しては樺山中將をはじめ、寺内正毅少將等軍人の御見送り申上ぐる者多く、彼を送る者にはビゴオをはじめ木村虎吉等があつた。而して船中の模様を

十二月一日 同行の人と云は第一に宮様を始め其お附の今井海軍大尉、大

黒田清輝と日清戰役

阪砲兵本廠の少佐栗山氏、氏は佛國及伊太利に居りし人にて段々巴里の事など話し出て面白し。其外には軍醫一名、議員二名、商船監督將校一名等也。門司より人夫の總大將として騎兵大尉佐伯美次郎と云人乗込む。オレと同じ部屋にたゞき込まれたり。午前九時半頃出帆す。名高き玄海灘に乗り入り波が少し高くなる。夕方に對州の沖を過ぐ。少しく舟に酔たる心地す。今井大尉と互に「ポドメートル」の財だめしをやる。又「トロコン」が饒別に呉れたる「ポドメートル」の試験をして見たるに甚だ面白く動く。此日朝より寝る時迄の間に歩きたる步數凡そ二萬三千也。今日は西北の風かなり強くしてすわり込る人多し。同行の軍醫先生も□□たれば醫者が酔とは可笑者、醫者も矢張山子なりなど、宮様が冷かされたなどは氣の毒(註三)。

と記してゐる。

斯くて、十二月四日大連灣に投錨、同日直ちに金州に向ひ出發、夕方到着し、第二軍司令部に大山大將、伊地知參謀等を訪ふた。翌五日には夙に第二軍に従軍せる洋風畫家山本芳翠及び淺井忠等に邂逅した。淺井は翌六日出發日本に歸つたが、山本は爾後略々黒田と行を共にした。

金州は既に十一月六日落城し、其處に行政廳が置かれて居たが、黒田は山本等と共に二十八年一月十八日威海衛攻略軍に参加出發する迄同地に滞在した。此間十一月八日より十二日に亘り、彼は大連より松樹山、海岸等の砲臺を見學する等のこともあつたが、専ら金州に在つて製作に従つた。金州に於ける早き作に「金州城内新聞記者及畫師の宿舍内部の圖」(美術研究所藏 高一八・二種 幅二五・四種 第二圖參照)がある。これはペン畫素描であり、其の日記に

十二月十五日 朝山本と天野の二人が部屋に居る様の畫をかく。夜は十二時頃迄山本と四面山の話をした(註四)。

とある作品に該當すべく、又彼自身其の裏書に

金州城
内新聞
記者及
畫師ノ
宿舍内
部ノ圖。
背面隆
起スル
モノハ
山本芳
翠ノ戰
圖ヲ描
ケルナ
リ。手
ニ扇ヲ
執リ火
ヲ煽ク
モノハ
天野鐵
腕ノ支
那服ヲ著ケ頭ニ支那騎兵ノ暖帽ヲ戴ケルナリ。水仙ハ南窓ノ暖ニ葦ヲ抽キ
毛衣ハ板壁ニ懸タリ。

圖二第 金州城内新聞記者及畫師の宿舍内部分の圖 美術研究藏

一〇

と説明してゐる。此の舍營の圖は好畫題なりしが如く、淺井忠も水彩畫を以てこれを試み、「ベチカのある室内」として描き遺してゐる(第三圖參照)。而して鐵腕天野は大阪朝日新聞記者として著名なる人、同じく第二軍に従軍し、黒田、山本と常に行を共にした。

又彼は「日本軍清國戰死者埋葬の圖」(高一・五・五種)を描いた。金州城外の荒涼たる地に、左手に吾が三名の兵士を描き、右手に鍬を持つて土を掘る二人の支那人を、中央に横臥せる一人の戰死者を描いてゐる。これは版畫家合田清に依て版畫として遺されてゐるが、其の寫生帖(美術研究所藏第十五號)に依れば、全體の構圖の外、背景の樹木、風景、戰死者等は別に個々に寫生されてゐる。其の日記に

十二月十八日 今日天氣もよいとも少し暖なり。金州城の門外にて支那兵の死體を埋葬し居る圖を作る。其れを以て荒川氏方へ行夜食の御馳走に成り歸る。云々(註五)。

と記されてゐるものに當る。而して翌十九日には軍旗祭あり、天野鐵腕は其の日記に

十二月十九日 又好晴。天に纖雲なく、風枝を鳴らさず。午前十時城の南部に出づれば第二聯隊早く既に整列し、樂隊進軍の譜(マルシユ)を奏す。大和尚山兀として天に聳ゆ。軍旗肅として銃列日に輝き、馬驕り兵勇めり。分列式畢りて城内東南隅なる孔子廟に宴を張る。予等始め南門を出づ、即ち好天氣に乘じ野外を歩するも亦快なりとて繞りて東門より入る。點々たる村落、楚々たる楊柳時に鵲飛び枝に止る。一幅の好畫圖、黒田、山本兩畫伯と畫を論じて城に入り孔子廟に至る(中略)。第二聯隊の宴を畢り、やがて第三聯隊の宴に移る。第三聯隊は城を離る、一里許楊家屯にして、大

和尚山下徐家店砲臺の近地に在り。再び南門を出で、行く。暫くして牛四頭を駕したる車あり。便ち黒田清輝氏と共に車夫を呼び車に乗る。牛轡りて行かず。車夫即ち鞭を揮ひ來々々といへば忽ち歩を進む。恰も木六駄の狂言の如し。(後略)(註六)。

と録し、黒田、山本の消息と平和に甦る金州の情景を傳へてゐる。

然し、寒氣の爲製作は意の儘でなかつた。

只招魂祭の圖や肖像等を描いたことを日記に依り知るが、今日所在を明にし得ぬのは遺憾である。斯くして、

彼は明治二十七年を金州の陣中に於て送つたが、十二月三十一日附を以て故國の久米桂一郎、合田清に宛てたる書簡は、彼の陣中生活を最も端的に示してゐる。即ち

第 三 圖 淺井忠筆 カチベのあの室内 千葉 淺井經一氏藏

ぐづ／＼して居る内に早今年も今日限りと爲つた。君等は定めし何處かの牛屋か何かで年忘れをやらかす事なるべし。此處も馬鹿にはならぬぞ。軍司令部だとか何んとか云ふ役所あり。此處には門松が立つと云ふしやれよ。餅も少しは渡る様な話だ。酒は先日より毎日渡るので山本杯は大喜び、毎日酔つぱらつて居る。氣樂な話よ。うむ實に氣樂と云ふ點じや申分はない。別に何を何日迄にしないかなんなど云ふことは無く、明日何處に行くか知れぬ身だから宵の内に明日する事を考へるにも及ばず、管理部から呉れるめしを食て其日送りに暮らして居る。此頃はもう金州の景色に目が慣れて描て置度いと思ふ處が少く爲つた。だが城外には随分いゝ處が澤山あるよ。もう少し暖かだといゝが、天氣は非常に好く此時節に取りては極珍らしい暖かさは云ふものは、廣い原につくなんとして畫でも描き始めると指の先がつめたいやら何やらで思ふ様になつてゐる。燒土の様な緑の色の少しもない野原の中に土や石で作つた小屋が二三軒在つて、其縁を柳の様な木が四五本シャツ／＼と生えて居るのだから、春に爲つて柳の芽が少し出た時なんぞには實に面白い景色に成るだらうと思はれるよ。先日旅順に行つて戰の有つた跡も見て歩いた時に、老鷹嘴とかいふ砲臺の中に在る營所でランテルタに張て有つた畫を一枚記念の爲に取て來たから、之を御歳暮の印に君等に送つてやる(註七)。

(註一) 從軍日記第一。猶十一月二十四日附久米桂一郎宛書簡(光風第三號所載)参照。

(註二) 同右。

(註三) 從軍日記第一。

(註四) 同右。

(註五) 同右。

(註六) 天野峻著「入清日記その他」(昭和四年刊)。

(註七) 毎日新聞明治二十八年一月十六日號所載「畫家の戰地觀察」(在金州黒田清輝氏の書信)。

三

明治二十八

年の新春を金州に迎へた彼は、第二軍の威海衛攻撃に従軍する迄猶十餘日を同地に過した。

而して、此の年初頭に「日本軍戦死者の墓」、「第二軍々司令部」及び「行政廳」等を描いた(註一)。

「日本軍戦死者の墓」は金州城外遙かに丘陵を望む平地に竝ぶ我が忠勇なる戦死者の墓標を描ける嚴肅、蕭條たる作品であり、特に毎日新聞の爲に描け

圖四第

日清戦役寫生帖の内

美術研究所藏

るものであつて、其の一月十五日號所載の挿繪に依て知るのみにして、原畫を明にし得ない。同じく第二軍に従軍して彼と起居を共にせる毎日新聞記者林政文は、此の作品の由來に就きて

元旦昧爽褥を出で、恭しく君國の平安(中略)。東門外一帶の平地は支那人の所謂北郊の地にして、幾杯の土饅頭は累々として相倚る。東門を出で、急に右折して行くこと六町許、幾個の木標と幾旒の小旗とは分明に我忠死者の墓地なることを認めしむ。墓地南北二十間、東西三十間周圍に土手を築き、土地の上に小松を植ゑ、土手の外に小濠を窄つ。中央に一大木標あり、書して招魂の碑と曰ふ。墓は其の後面及び前面に在り、都て四十九。墓標の周圍に石を樹つるものあり、木を植ゆるものあり、皆其隊友の爲せし所なり。中に疎末なる板を以て膳様のものを作り上に饅頭を載せ、傍らに一束の寒菊を供へたるものあり。花色未だ褪めず、恨として北風に立つ。傷心言ふに堪へず。同行の黒田清輝氏を顧みて曰く、別離の際に灑がざる涙も、此に至りて衣襟の沾ふを覺へざるものありと。黒田氏亦涙數行下る。特に予の爲めに墓地の圖を畫かる。新春先づ筆を墓地に就く、豈寓意なしとせんや(後略)。

と報じてゐる(註二)。又「第二軍々司令部」及び「行政廳」も毎日新聞及び福陵新聞の爲に描けるものであるが、前者にはこれ等の掲載されたのを見ない。

而して、金州滞在中の最も纏つた作品は「占領後の金州城」である。これも今日その原畫は失はれ、合田清の彫鐫に依る版畫(高一五釐 幅二二釐 P.L. VII. 参照)及び毎日新聞明治二十八年一月十八日號所載の挿繪に依て知り得る。此の作品は金州城内關帝廟の市場の前に屯する支那の老

幼の商人より物を購ひ或は茶を求めてゐる吾が將兵を描き、占領後の極めて和やかな城内風景を寫し出してゐる。天野鐵腕が其の日記に

城内關帝廟の市場は日一日繁昌せり。生魚には大口魚、鰻、鹽魚は鱈、銀刀魚、野菜は白菜、葱、蒜、川芎（支那人は野菜として用ゐるよし）自然生薯等あり。煙草、麥餅、玉蜀黍餅亦あり。各聲を張あげて曰く砂糖餅曰く飴と。日本の單語を以て賣るに至れり。役夫等爭ふて之を買ふ。又牛、豚、鷄鶩等の賣口も盛なり。物價は稍々低下して卵一個二錢五厘に至る。餘は之に準ず（註三）。

と記したると符合する。而も、彼はその寫生帖（美術研究所藏第十六號 高一・二〇〇 幅一八・五 厘）に全體の構圖（第四圖參照）のほか、吾が將兵をはじめ支那商人、建築物等を部分的に詳細に寫生し、後初めて此の圖を構成したことを知る。其の日記に

一月七日 金州繁昌の圖を描き始む。其畫の爲夜一時半迄起て居た（後略）。
一月八日 昨日かき懸た畫をかいて仕舞ひ林君に渡す（後略）（註四）。

と記し、其の構成に腐心せることを知る。

是等の作品のほか、彼は金州舍營病院を訪ひ、病室内の圖或は軍醫、戰傷將士の肖像等を寫し（寫生帖第十六號）或は大赫山を中心として展開せる戰鬪下圖を描き（寫生帖第十五號）、又金州城一番乗の第二聯隊旗手吉田少尉の像等を描いた（註五）。又寫生帖中風景寫生として纏つたものには金州城内を描ける圖がある（第 PL. X 9 參照）。これは城門の内に多くの牛車の或は停り、或は動いてゐる情景を寫したものである。

而して、茲に附記したいのは、金州滯留中明治二十八年京都に於て開催された第四回内國勸業博覽會審査官として内定したことである。

即ち其の日記に

一月五日 村田少佐よりの手紙一通届く。父上様よりの御書面が封入して有つた。先月二十四日の日附にて松方君が九鬼氏へオレの話をして當年の京都の博覽會の審査官に周旋し呉れたる故二月始迄に歸朝す可き旨來りぬ。夕方行政廳に行荒川氏に日本より來し書狀に付相談す。歸朝を賛成せられたるに依り其通決心す（註六）。

と記してゐる。然るに、後日軍司令部に於て威海衛攻撃を觀戰して歸國するやうとの慫慂を受け、かくて更に第二軍の威海衛攻撃に従軍すること、なつた。

- （註一） 從軍日記第一、明治二十八年一月二日。
- （註二） 毎日新聞明治二十八年一月十四日號所載「新占領地の新年」。
- （註三） 天野峻著「入清日記その他」明治二十七年十二月十二日の條。
- （註四） 從軍日記第一。
- （註五） 同右。
- （註六） 同右。

四

二十八年一月十八日軍の出動に従ひ金州を出發した。彼等の一行は五名、其中には山本芳翠もあつた。

一月十八日 朝めし後松方氏を訪ふ留守也。晝めし後山本君等五人と金州を立出づ。餘の五人は荷物等の爲先發す。柳樹屯に着する前村田少佐に出

逢ふ。直に兵庫丸に乗込む。下等の下等即ち馬と同じ處に乗せられ皆々大不平。馬の面を下からながめながらねることも亦妙也。十九艘の運送船が四艘の軍艦に護せられて出懸たる有様は勇し。日の入らんとする頃に大連灣の外に出づ(註一)。

斯くて二十日、遠く砲聲を聞きつ、次第に山東半島の東突端に近づき、午後營城灣に上陸し、雪を踏んで東方大西庄に向ひ、此處に宿つた。大西庄舍營の數日の間に、其の近郊の臥龍村、成山廟或は海岸の燈臺を訪ねた。成山廟は特に再度訪れ、其の寫生帖(美術研究所藏第十四號 高一・二・三寸 幅一・八・七寸)に淡彩素描の寫生を遺してゐる(Pl. X 10 参照)。これに就て彼は

一月二十一日(前略)臥龍村といふ所を通つて成山廟といふのを觀に行た。臥龍村は地に高低が多く路が曲りくねつて其間に人家が在る。白く塗つた土塀に立派な楷字が一杯書いてあるのなどが有つて面白く感じた。成山廟は高い崖の上に海の方へ向つて建て、ある入口に一寸形のい、鐘樓が有る。一寸立派なものだ。此の成山廟は此邊では第一等の建築物だ。本堂に驃騎將軍霍去病が祭つて有る。海上の安全を守る神として有るらしい。方丈といふやうな處には掛物も四五幅掛けて有つた。頭巾の中に辮髪を曲げ込んで怪しげな坊主が二人居て案内をした。云々(註二)。

と説明してゐる。

一月二十五日大西庄を出發、興津邊りにも似た和かな海を望見しつつ榮城に入つた。此處に支那の正月を迎へ、次いで二十七日には埠柳村に進んだ。此の寒村は彼の畫興を唆る風景に充ちてゐたが、翌日の進撃の爲寫生も意のまゝでなかつた。只其の寫生帖に「埠柳村の晩景」

(Pl. X 12)を遺してゐる。而して、其の日記に

一月二十七日 今朝も雪が少し降つて居り風が有つて寒い。九時半頃に榮城を立つて埠柳村と云ふ處まで進だ。此の間の里數は凡そ我三里位だ。埠柳村は少し低い様な所で村の外づれに川が有る。又村の中には溝が掘つてあつて其岸に柳などが植ゑてある。一寸雅致がある。寒さは強い。川の水などは皆凍つて居る。川の上は自在に歩ける。然し雪は割合に少い。今夜の宿は街道筋の右側の家だ。相變らず土間に著物を著た儘毛布にくるまつてごろりとやるのだ。慣れて見ると結局此の生活程氣樂なことはない。人夫と輸卒が米の俵を一つづ、背負つて夜徹し引續いて家の前を通つた。輸卒など、云ふものは實に難儀をするものだ(註三)。

と記して居る。「埠柳村の晩景」は勿卒の間に描かれたものであるが、その冬木立に於ける堅實なる筆致と、鉛筆の濃淡の調子は極めて秀れてゐる。

二十八日風雪を冒して出發、牙格城を過ぎ橋頭集なる村に入る。此の邊は既に威海衛の外廓地帯の新戰場であつて、時々砲聲を聞きつ、進んだ。翌日は孟家庄に至つて宿り、翌三十日愈々待望の陸軍の威海衛攻撃を觀戦するを得た。其の日記に

一月三十日 昨夜十時頃傳令使が來て、明午前四時半に司令官出陣のよし申來る。此れより皆々起出て出發の用意をなし、十二時近き頃ねる。一寸ねむつたと思ふ内に早三時故、起出仕度して立つ。暗き故、一同餘り散るまじと云ふ約束にて、いつもと違ひ一筋に爲て行く。我々は張家口の右方に見ゆる石堂有る山の上に居て戰況を見る可しと云命故、其山を當に出懸く。昨日此の張家口迄來て置たお蔭で、張家口迄の道はやみなれど難無く行きたれど、石堂の有る山とはどれだか知れず、張家口の入口の圍道の様

な小徑を右に取て行けばとう／＼分らなくなる。此の頃はもう東も白み夜が明た。仕方なく林君が先登^(ヤマ)にて、前に見える山に人影の見ゆるをあてに雪に足をすべらしながらよち登る。未だ絶頂に達せぬ内に、大砲小銃の音が聞え始め

た。前に見

えた人影は、

露國大佐と

池田少佐也。

併、我々の

上る可き山

の此の山に

あらで、之

れより北方

凡二千メー

トル、即ち

石の堂も此

處から見れ

ばよく分る

也。目の前

に在る二師

團の戦は其

儘にして置

き、山の峯

を上つたり下つたり大骨折にて石堂の有る山に登り得たり。此の山の名はフエイテンと云よし。此處に到し時は、日も地平線上にあが□□石堂の

藏所究研術美

内の帖生寫役戰清日

圖五第

片ひらは黄く爲た。二師團の戦は已に片がついたものにや銃聲も聞えず。

其代りに、直正面に見ゆる百尺崖處の砲臺を攻撃する我艦隊の運動しきりに爲て來た。其内に、第六師團と覺しく右手の方から出て來たる一隊かけ

足にて川を涉り、前進するなど、中々に心地よし。しばらく有つて、我軍

艦中の一艘に煙が盛に起り、沖の方に走る。是正しく敵の彈丸の爲に失火

せしものか、此の様を見た時には甚だ残念でたまらなかつたが、間も無く

鎮火せしものと見えたので夫で安心した。此の山に登る爲め汗だらけに爲

て仕舞ひ、山の上に来れば風がヒュ／＼ Courant d'air のなんのかんの

と云さわざぢやなく、丸で氷に包まれて居る様だつた。併し、此の戦の最

中に寒いからと云て逃るわけにも不行、風を引く事は覺悟して仕舞つた。

かれこれして居る内、晝近く爲て腹がへつて來たから石堂の中に入つて氷

の如きめしをむしや／＼と食ふ。腹が冷えきつて居る處へ中から冷やした

ので身振が出た。従軍以來こんな寒い思ひをした事はないと山本が云た。

此の時に、敵の陸地防禦の一の砲臺に火が起つたものゝ如く、煙の出を

見る。夫れに引續き、海岸に一と圍りの煙上れり。砲聲の幽き音聞ゆ。之

れ海岸に在る砲臺の一が破裂したるものか。之れより一二砲臺の上に立て

有りし旗も次第に見へずなり砲聲も減じぬ。一同打連れて軍司令部の有り

と覺しき處を探し、山の西方に下り行、谷合の處に到る比に向の方より三

十人許の支那人がやつて來る。赤き被物を被たものなどがいかにも敗兵ら

しく見ゆるので、いよ／＼此の新開隊にて一と戦せんと銘々レボルベール

など手に持ち進む。近づけば敗兵どころか此の邊の百姓共が女子供を引き

連れ、大きな包などかゝへて山へ逃げ込む處也。赤く見へて清兵の軍服と

見しは子供の被物なりければ大笑となりぬ(後略)(註四)。

と記してゐる。寫生帖(第十四號)に重疊たる山嶽を俯瞰せし、遠く

威海衛の海を望む鳥瞰圖があり、これは毎日新聞明治二十八年二月二

十日號に挿繪として掲げられてゐるが、完成されたものではなく、寧ろ日記の記述が詳細を極めてゐる。

斯くして、此の夜は温泉湯なる小村に宿つた。此處は地名の如く河原より湧出づる温泉があり、河原より山嶽への景觀は美しいものであつたが、風雪の爲寫生意の如くでなかつた。

二月一日虎山に移り、歸朝まで旬日を此處に過した。而して、二月三日夜には、我が水雷艇の威海衛攻撃を観戦した。恰も、數日來感冒氣であつた彼は、病を押して參加した。

二月三日（前略）又夜食後六時頃に藤井少佐が來て、今夜は海軍が水雷艇を以て攻撃をする筈故、望の者は見物に行可しと達せられたり。即ち、皆々身ごしらへを爲す。おれは未だ風がよく爲らず、今此處で山上か海岸に出て夜明かしをすると甚だ面白くないが、皆が行くと云のに、風引だと云て引込で居るのは餘り残念な話。夫れに、おれが此の戦見物にわざ／＼出懸て來たのは、何も樂をしに來て居る譯ぢやない。いよ／＼此の病が強くなるものか一番運だめしに行て見んと皆々打連れて出懸。おぼろ月夜に雪の道虎山村を出て威海衛街道に入り、五六町行て右の方に在る小高き山に登りたり。此の山の上に野砲四門有り。之れは去二十九日に張家口子に在りし我兵を打ちしものならんか。此の山の峯を通りぬけて又一の高き山に登り、岩山の間に坐して海戦を見る事半時許、目の前燈光二つ程見ゆ。敵の軍艦か又は劉公島の砲臺か、其他は只どろりとして居て何も見へず。時々火打石を打つ如くぴかり／＼として砲聲聞ゆ（後略）（註五）。

と記して居る。更に七日には陸海軍の威海衛總攻撃を観戦した。

二月七日 同宿の者少し寝過て六時半頃に起出で、芳翠老の佛蘭西流のソップを飲み出懸く。此時は已に大砲の音が聞え始めたが、先夜登りし山の

麓に至る頃には敵方よりの砲聲が小銃の打合程繁く實に盛也。山の上に上り付き、しばらく立て〇島の砲臺に火する。火藥庫の破裂と見ゆ。此の頃より七八艘の軍艦が祭祀砲臺の前がわの方に集りたり。此の時、一と條の黒烟を長く引て北山嘴の鼻を過ぎ走る軍艦を見る。此の舟が山影にかくれたる頃に、又一の軍艦劉公島の後にあらはれたり。之れ我艦が敵の北るを逐ふものか。此れより砲聲も静りければ、今日の戦は大體此にて終りたるならんと思ひ、遙かあなたに見ゆる此邊で一番高き山の上に司令官の居らる、様子故、其方に向ひ行く。ちり／＼に分れて出懸けし我黨の者共も皆此處にて合す。又松方君、ドラブリー氏等に逢ふ。十一時過に司令官について山を下り、宿所に歸る。（中略）今日は極めて長閑な天氣、夫れに今朝の戦勝と來て誠に心地よし。松方君が見へて一緒に散歩に出懸く。司令部の前で軍樂隊が諸國のたのしきふしの樂を奏して居たのでしばらく聞て居た（後略）（註六）。

と此の總攻撃の日を叙して居る。

斯くて、威海衛陷落を機として歸朝を決意し、二月十一日虎山を出發、温泉湯を経て蔭山口に出で寺内少將と同船小蒸汽船にて出帆、次で病院船神祐丸に移乗、更に十三日萬國丸に移り、十五日下の關に入港更に海路宇品に歸著した。

以上其の寫生帖及び日記、書簡等に依て彼の日清戦役從軍のことを述べたが、右の如く此の從軍の結果としての油繪大作はないが、寫生帖以外にも數枚の纏つた作品を遺してゐることを知る。殊に彼が青年時代に此の尊き國家の重大事件を具に體驗したことは、其の傳記上看過出來ない。

（註一）從軍日記第一。

(一) 黒田清輝筆
清兵捕虜新橋驛着ノ圖

東京 合田弘一氏藏

(二) 黒田清輝筆
占領後ノ金州城

美術研究所藏

黒田清輝日清戰役從軍寫生帖ノ内

黑田清輝日清戰役從軍寫生帖ノ内

美術研究所藏

黒田清輝 日清戰役從軍寫生帖ノ内

(註二) 從軍日記第二。

(註三) 同右。猶、天野皎は其の「入清日記」に「一月二十七日(前略)。此夜は大軍の一時に集まりし事とて我一行の舍營は素より狭く予と黒田從五位(清輝)と馬夫二人は背戸の木小屋に例の乾草を敷いて眠れり。此夜雪ふる。或人戯れて曰く予や先に營城灣上陸の時長持の上に眠り今又雪夜木小屋に臥す恰も忠臣藏の天川屋義平と師直の如しと。實に然り、小屋の内冷氣人を侵す。終夜人馬の喧聲を聞く。恰も昔時東海道路に宿れる思ひあり。」と其の辛苦を述べてゐる。

(註四) 從軍日記第一。

(註五) 同右。

(註六) 同右。